

(資料1)



(資料2)



関東地方 5000年前  
海面は今より5m高かった



現在

・巨大都市東京は、本来、地形の変化に富み豊かな水の生態系を誇る「水の都市」である。その姿を先ずはエコヒストリーとして解き明かす。  
源流から東京湾まで

参照：サライサワ種パンフ

法政大学エコ地域デザイン研究所  
歴史+エコロジーの視点

(資料3)



・東京は、多様な水の空間をもつ都市である。



1850年頃

荷風も『目和下駄』のなかですで見抜いている。品川の海湾、兩田川や多摩川の大きな河川、神田川や音無川のような中小の河川、日本橋や深川を流れる掘割、根津の藍染川や麻布の古川のような溝渠、もしくは下水化した水路、さらに江戸城を取り巻く幾重の濠、そして不忍池などの池、数多く存在した井戸、と手際よく区分し、江戸から東京に受け継がれた水の空間を、地勢やエコシステムと重ねて論じた。

## (資料4)



## (資料5)



伝統と現代の共存、祭り：お台場海浜公園の海中渡御(荏原神社)  
 単なる土木的、フィジカルな環境整備は問題  
 記憶・生活文化、ソフトが重要

## (資料6)

### 歴史の中の水の都市

(水の都市、田園都市 戦後におけるその喪失から復権へ)



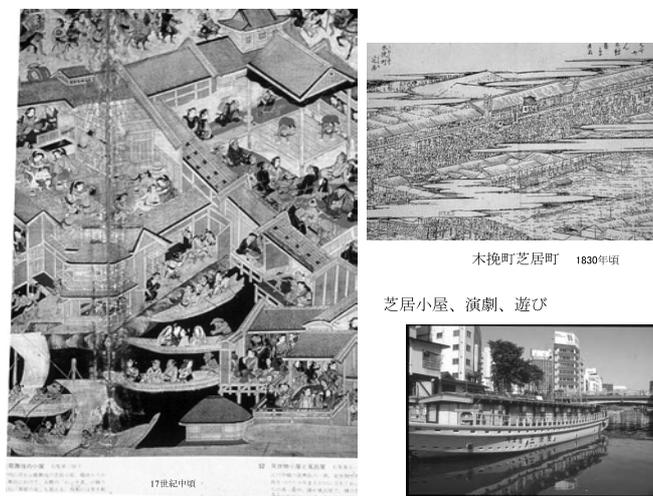
### 様々な形態、機能・活動、意味をもつ水辺空間

飲料水、農業、漁業、舟運・商業活動、生産、宗教・儀礼・祭礼、レクリエーション  
 演劇、観光、アメニティ、風景 等

(資料7)



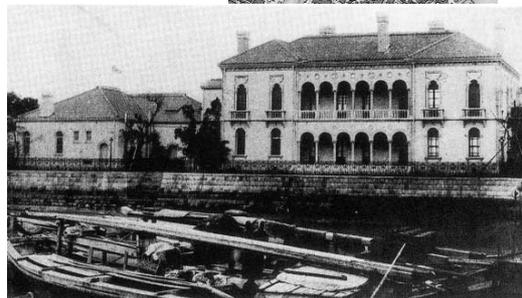
(資料8)



(資料9)

・近代にも水の都市が持続  
 文明開化の水辺  
 日本橋川、橋のたもとのランドマーク  
 築地外人居留地

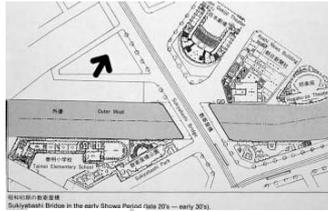
浜沢栄一郎



(資料10)

モダン東京の水辺  
橋、プロムナード、近代建築、臨川公園

運河の活用、舟運・艇、水上生活  
貨物駅は河岸に



昭和初期の東京景観  
(Tokyo in the early Showa Period (1920s - early 1930s))



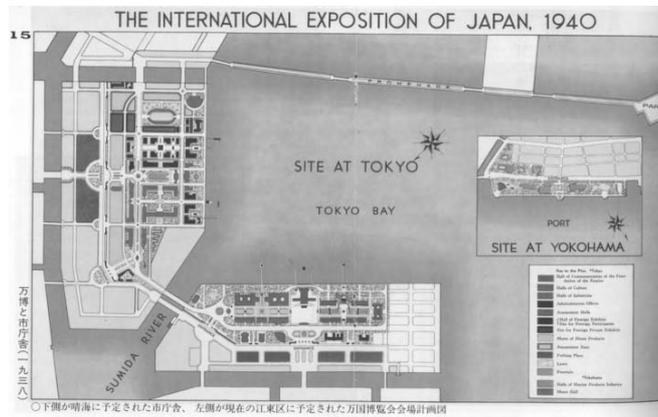
銀座-教寄屋橋



銀座-教寄屋橋

(資料11)

東京湾への夢



○下側が晴海に予定された市庁舎、左側が現在の江東区に予定された万国博覧会会場計画図

(資料12)



水の都市の価値の再発見 1980-現在

## (資料13)

### ■水の都市 外国との比較

#### マスタープラン、グランドデザインの不在

アジア：トップダウン形式を基礎とする再生事業  
欧米：自治体による計画性をもった公共的再生事業とは違う  
それに比べ、多様な市民、住民の活動によって水辺が暮らし、個性づけられる東京。  
都心、ベイエリアは市民・住民不在  
ディベロッパー任せ、欧米・アジアとの違い

### ■経済vs環境、経済vs文化をどう克服するか？

金融・IT都市から クリエイティブ・シティへ  
コンベンション、文化観光の促進 風景、文化の活用で



## (資料14)

アムステルダム中央駅 水陸交通の結節点

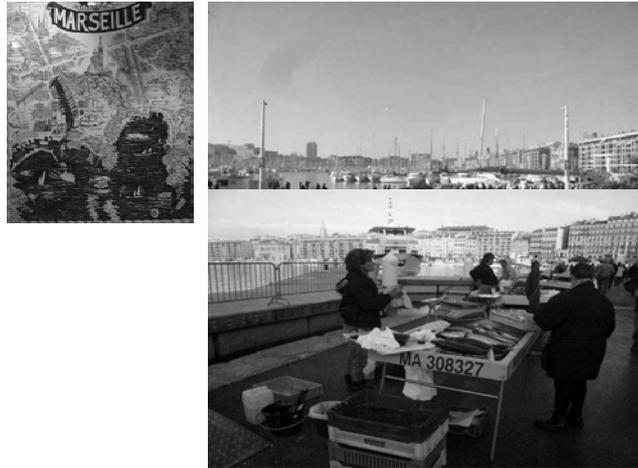
アムステルダム市都市計画局 van Ruyven氏提供



## (資料15)



(資料 16)



(資料 17)



(資料 18)

